

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 24 年目
創刊 1989 年 No.273

GEKKAN-WIEN 2012年3月号



Gustav Klimt
Griechische Antike II (Pallas Athene)
Zwickelbild an der Nordseite des Stiegenhauses im
Kunsthistorischen Museum
1890/91
© Wine, Kunsthistorisches Museum



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 6



福島第一原子力発電所の事故を受けて昨年五月、欧州連合（EU）は原子力発電所を有する十四ヶ国、百四三基の原子炉について、ストレステストを実施することを決めた。「テスト」と言うが試験を実施するように聞こえるが、実際には原子力発電施設が全交流電源と最終熱除去機能の喪失などに直面した場合に施設がどれだけ持ちこたえられるかを調べ、安全対策がどれだけ堅牢であるかを評価するものである。福島事故のような厳しい状況に見舞われた時、事前の安全対策が次々と喪失する状況を調べ、それによって技術と組織の両面から深層防護と事故管理体制の問題点を評価し、改善点を抽出するのが狙いである。事業者は昨年十月末までに評価報告書を各国の規制当局に提出し、各国はその結果をレビューして年末までに欧州委員会に報告している。欧州委員会はその結果をレビューして最終報告書

を本年六月に欧州理事会に提出する予定となっている。

我が国でも昨年七月、EUの状況を参考に安全性に関する総合的評価を実施することを決定した。定期点検中の原子炉を対象に炉心損傷前までを主な対象とした二次評価とその後全原子炉を対象として炉心損傷後も含む二次評価に分けている。目的、狙いはEUとほぼ同様である。ただし、EUではテストの結果を可否判定には用いないが、我が国では二次評価の結果を再稼働の条件としている。二月二日現在、電力会社九社の十六基の原子炉について一次評価が原子力安全・関西電力大飯三号機と四号機については保安院のレビューが終了し、二月十三日、原子力安全委員会、評価結果は妥当と報告された。これを受け、原子力安全委員会による検討が二月二日から開始された。筆者はこの検討に外部有識者六名の一人として参加している。シビアアクシデント参加の知識や経験が少しでもお役に立てばと思ひ微力を尽くしたい。

さて、十月号でウィーンと京都の共通点の一つに地形的な類似性を挙げた。ウィーンは元々ウィーン盆地の西端にあり、アルペンフォアランドと呼ばれる丘陵地帯ウィーンの森に沿って南北に広がっている。一方、京都は東に東山

連峰、北に北山、西に西山山脈が広がり、南に開けた盆地である。ウィーンは北から南東にドナウ川が流れ、京都では北から南に鴨川が流れている。ドナウ川の先に国際原子力機関（IAEA）などが入るウィーン国際センターがあり、鴨川の先に京都国際会館がある所まで似ている。さらに、ウィーンの東には欧州最大の平原湖ノイジードラー湖が拡がり、京都の東には我が国最大の琵琶湖がある。両市とも盆地であるため、夏は暑く冬は寒い。ウィーンの冬は氷点下十度以下、夏も年によっては結構暑い。京都の夏は格別暑く、冬も「底冷えがする」と言われる程寒い。筆者が大学入学試験を受けた昭和四四年三月に大雪が降ったことは忘れられない。

余談であるが、一月末から二週間程、福島事故関係の会合に出席するためウィーンに出張した。零下十度以下の日もあった。到着した二十九日、市立公園を散歩して国立オペラ座に寄ったらバレエ公演の当日券が一枚残っていたので購入した。「ラ・シルフィード」という悲恋物語は初めて観たが、三年のローザンヌ国際バレエコンクールで奨励賞を獲得した当時十七才のニーナ・ポラコヴァの踊りが感動的だった。国立オペラ座は三年振りであったが、いつ来ても外見も中の造りも素晴らしい。その雰囲気が少ないでも伝わらばと思ひ、やや古い素人のスケッチで恐縮であるが掲載させて頂く。



3号機：電動及びタービン動補助給水ポンプは浸水しない



原子力安全・保安院「審査報告書」より
http://www.nisa.meti.go.jp/Chokoku/0/000/25/000/0-1-2.pdf

■杉本純

京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長